

伝藤原為家筆『源氏物語』薄雲卷断簡の紹介

田中 登

はじめに

「物語の古筆切を見たら源氏か伊勢と思え」とは、物語古筆切の研究に先駆的な役割を果たした藤井隆氏の言。^{〔1〕}古今集や和漢朗詠集には遠く及ばないにしても、時代を鎌倉・室町期にまで下げてみれば、この両物語、とりわけ源氏のそれは、どうしてなかなか豊富な伝存量であることが知られる。

いったい、源氏物語の古筆切はどれほど伝存するのか。幸いにして、この方面については、小林強氏の報告がある。「源氏物語関係古筆切資料集成稿」^{〔2〕}がそれで、そこには、源氏集や梗概本・系図・注釈類は別にし、物語そのものに限ってみても、およそ三百種もの切の存在が、伝称筆者別に列挙してあり、後学に多大な便宜を提供してくれている。

これほど豊富な伝存量を誇っているのであれば、さぞかし、古筆切を利用しての本文研究も進んでいることだろう、と思ふむきもあるいはあるかもしれぬが、しかし、実際には、そうなかなかうまい具合にはゆかない。なぜなら、源氏物語は天下に名高い長編作品ゆえ、一枚、二枚の断簡の存在が知られたとして、そのわずかな断簡から、もとの本の系統など、とてもではないが推測することは不可能だからである。巻が違えば、本文系統が違ふことはいくらでも例のあることだし、また、筆跡が違ったとしても、巻が異なれば、もと一具の写本だったということもあるに違いない。

したがって、前記小林氏の労作疑いなきリストの存在にもかわらず、ただただ呆然として手をこまねいているより他、なすすべを知らないというのが、正直なところ実状であろう。

だが、それでも、ごく近年の例でいえば、伝存枚数の比較的多い伊予切についての新見哲彦氏の研究のごとき、古筆切を利用しての見事な成果もないわけではないことを思えば、いたずらに絶望ばかりしているわけにもゆくまい。たとえ道は遠くとも、できるところから手を付け、今に残されている古筆切を有効に利用する方途を探るのも、現在のわれわれに課された仕事であろう。

近年、稿者は『平成新修古筆資料集』第四集を刊行し、その中に、河内本系統の本文を伝えているとおぼしき、藤原為家筆と称する大四半切を一葉紹介しえたが、ほぼそれと時を同じくし、実践女子大学文芸資料研究所長の横井孝氏から、同研究所所蔵の上記のツレと思われる切を示され、それを本誌に紹介しようと思われた。まことにありがたいお話である。当該断簡は、伝存するもの一枚、二枚ではなく、薄雲巻に限っても十二葉確認でき、しかもツレは他の巻々にも及んでいるようなので、ここにそれらを紹介し、もって、今後の研究の便に供することとしたい。

ここに紹介する古筆切は、本研究所の所蔵になるもので、軸装された一葉。もと大四半形の冊子本⁵⁾で、本紙の大きさは縦三二・八センチ、横二六・三センチ。料紙は斐紙。一面の行数は十一行で、至る所に朱の句点が見られる。伝称筆者は藤原為家となっているが、冷泉家時雨亭文庫に伝存する、あまた伝わる為家の筆跡に比し、同筆とはいいたいようである。しかしながら、大振りの堂々としたその書風から、書写年代は為家が活躍したのと同じ鎌倉中期ごろと認めても、まずは大過なからう。以下に全文を翻刻する（朱の句点は省略するが、読解の便宜上、適宜私に濁点・句読点を施した）。

- (1) うつりて、さうし給はりてまいり給へり。おとゞたいめし
- (2) 給て、このことをもし事のついでありて、つゆばかり
- (3) にもそうし給ことやありけむと、あないし給へど、
- (4) さらにかけてもきこしめさむ事を、いみじきことに
- (5) おぼしめして、かつはつみうることもやと、うへの御た
- (6) めのことをも、おぼしめしなげきたりしなどきこ
- (7) ゆるにも、ひとかたならず心ふかくおはせしおほん
- (8) ありさまなどを、つきせずこひきこえ給。斎宮の
- (9) 女御はおほし、もしるき御うしろみにて、やんごとな

- (10) き御おほえなり。御よういありさまなども、思さまにあらま
 (11) ほしくみえ給へば、かたじけなきものに、もてかしづ

薄雲卷で、場面は、冷泉帝の出生の秘密をめぐり、源氏と王命婦とが会話を交わす場面。すでにいわれているように、当該断簡の本文は河内本系統であるが、一応ここでもそれを確かめておきたい。本文は、当該断簡と青表紙本系の大島本との間に異同がある箇所につき、それが河内本系の代表的な本文である尾州家本では、どうなっているかを示したものの。各行頭の数字は、右に翻刻した断簡の行数を示す。

大島本

断簡

尾州家本

- | | | | |
|------|---------|----------|-----------|
| (1) | まいりたり | まいり給へり | まいり給へり |
| (1) | たいめむ | たいめ | たいめ |
| (2) | もの、ついでに | 事のついでありて | ことのついでありて |
| (3) | もらしそうし | そうし | そうし |
| (3) | ありしと | ありけむと | ありけむと |
| (5) | 事にやと | こともやと | こともやと |
| (5) | 御ためを猶 | 御ためのことをも | 御ためのことをも |
| (6) | なげきたりしと | なげきたりしなど | なげきたりしなど |
| (10) | あらまほしう | あらまほしく | あらまほしく |

こうしてみてみると、断簡の本文が完全に尾州家本のそれに一致していることが知られよう。

二

このついでに、架蔵の断簡についても触れておこう。すでに『平成新修古筆資料集』の第四集に凶版入りで紹介したが、紙幅の関係で、本文の系統については、結論的なことしか述べる余裕がなかったものである。断簡の大きさは縦三一・六センチ、横一八・二センチで、これは左端三行分が切り取られ、全文は次の八行となっている。

- (1) 人、めのとよりははじめて、よになきかさねいろあ
 - (2) ひをと、思ひいそぎてぞおくりたまひける。まち
 - (3) どをならんも、いとゞさればよと、おもはんがいとをし
 - (4) ければ、としのうちにしのびてわたり給へり。いとゞ
 - (5) さびしきすまひに、あけくれのかしづきくさを
 - (6) さへひきはなれておもふらん事の心ぐるしければ、
 - (7) 御文などもたえまなくつかはす。おんなぎみもい
 - (8) まはことにゑむじきこえたまはず。うつくしき
- 同じく薄雲巻で、源氏が明石上を大堰に訪ねる場面だが、先程と同様の異同表を左に掲げてみる。

大島本

断簡

尾州家本

- (1) 人くゝに
色あひを

人

かさねいろあひを

人

かさねいろあひを

(2)	をくりきこえ	おくり	をくり
(3)	思はむに	おもはんが	おもはんが
(6)	はなれきこえて	ひきはなれて	ひきはなれて
(8)	ゑじ	ゑむじ	ゑむじ

これまた断簡の本文が、河内本系の尾州家本と一致していること、一目瞭然であろう。

三

この伝為家筆の断簡について、高田信敬・池田和臣・小林強・大内英範らの諸氏⁽⁸⁾が、ツレを世に紹介するにあたって、申し合わせたかのように尾州家本との類似点を指摘しているのは、注目に値しよう。断簡と尾州家本との類似点は、これを簡潔にまとめてみれば、次の五点ということになろう。

- 一、書物としての大きさ。
- 二、一面十一行という行数。
- 三、書写年代の古さ。
- 四、本文の系統。
- 五、本文に付された朱の句点の存在。

まず、一の書物としての大きさであるが、尾州家本のそれは、縦三一・八センチ、横二五・八センチで、古筆の世⁽⁹⁾界でいえば、紛れもなく大四半本ということになろう。一方、伝為家筆の断簡はといえば、これは当然のことながら

切によってまちまちだが、管見に入るところ、池田和臣氏の所蔵になるといふ断簡が、縦三三・七センチ、横二六・一センチあつて、これが現状では、原寸に一番近いものであろう。¹¹

古筆の世界では、縦の寸法がおよそ三〇センチにも達していたら、まずは卷子本の断簡と判断するのが常識というものだが、当該断簡は、一時期卷子本に改装¹²されていた時期もあるものの、冊子本時代の綴穴の跡がはっきりと窺えるものもあり、超大型の冊子本として、尾州家本の形態上の特色と共に、この際、注意をしておいてよいものである。¹³

二の一面の行数と、五の朱の句点の存在が、これまた尾州家本と一致するというのも、鎌倉時代における河内本の伝来や流布の問題を考えるにあたって、留意すべき点であらう。

四の本文系統は、今更いわずもがなのことであるが、一番注目すべきは、三の書写年代である。すでに述べたように、古筆見のいふ為家筆というのは、認められないにしても、その大振りの堂々たる書風は、明らかに鎌倉中期ごろにまで遡ることができるものであり、源氏の古筆切¹⁴としても、伝西行筆切・伝慈円筆切・伝後京極良経筆切・伝寂蓮筆切などに次ぐ古さを誇るものであろう。

片や、尾州家本については、周知のように、正嘉二年（一二五八）の奥書が見られ、補写の卷々を別とすれば、その書風もなるほどとうなずきたくなるような立派なものであり、当該断簡との先後関係が注目されよう。

だが、尾州家本のこの奥書については、その信憑性を疑う説¹⁵もあり、また本文そのものについても、一部の卷々に関して、河内本系統であることを疑問視する声も出ており、同本を巡る問題点はまだまだたくさんありそうである。

これまで河内本系の代表的本文のようにいわれていた尾州家本ではあるが、その根拠に種々問題ありとせば、なおさらのこと、この伝為家筆切の存在が注目されてしかるべきであらう。

ここには、ツレとおぼしき二葉の断簡を紹介してきたのだが、これがすべてというわけではない。この薄雲巻に限っても、管見に入るところ十二葉もの切の存在が確認されているのである。以下にそれらを一覧しておきたい（掲載の順序は物語の展開順により、各断簡には、『源氏物語大成』の頁数・行数と書き出しの数文字を記した）。

- a 六〇五・9 しひても 国文学研究資料館蔵。『源氏物語千年のかがやき』。
- b 六〇七・8 とめでたく 『筑波書店古書目録』八十号。
- c 六〇八・7 よりはなやかに 久下裕利氏蔵。『筑波書店古書目録』八十五号。
- d 六〇八・13 山里の 国文学研究資料館蔵。『源氏物語千年のかがやき』。
- e 六〇九・12 くゝにめのとの 田中登蔵。『平成新修古筆資料集』第四集。
- f 六一〇・5 にまいりつどひ 鶴見大学図書館『和歌と物語』。
- g 六一一・3 くしもの 池田和臣氏蔵。『人物で読む源氏物語 紫の上』。
- h 六一八・5 はのこずゑ 国文学研究資料館。『古筆への誘い』。
- i 六二四・9 みかどあかず 『筑波書店古書目録』八十三号。
- j 六二五・1 うつりてそうし 実践女子大学芸芸資料研究所蔵。
- k 六二八・1 うちゆきかはる 『古筆学大成』第二十三卷。
- l 六二九・14 まさりけめと 国文学研究資料館蔵。『源氏物語千年のかがやき』。

稿者は冒頭で、源氏物語は長編の作品ゆえ、断簡が一葉、二葉あるだけでは、本文研究の上では、いかんともしいたい旨を述べたが、伝為家筆切についていえば、薄雲巻に限っても、これだけ伝存するとなると、これらの断簡を放っておく手はなからう。鎌倉中期と書写年代も古いことを思えば、源氏物語の本文研究に、これを積極的に取り入れ

てゆくのが、むしろ研究者としての勤めといえよう。

四

前項で、この伝為家筆切が、薄雲巻だけでも十二葉の存在が確認できる旨を述べたが、実は、この切、何も薄雲巻に限らず、他の巻々にも、ツレとおぼしき切が伝存しているのである。図版でそれと確認できたものに限って挙げれば、次のとおり。

a 若紫巻 『古筆学大成』第二十二卷。

b 賢木巻 『古筆学大成』第二十三卷。鶴見大学図警館『古典籍と古筆切』ほか。

c 真木柱巻 『古筆学大成』第二十三巻ほか。

以上は、為家筆と伝える薄雲巻の諸断簡と明らかに同筆と認められるものに限っているが、cの『古筆学大成』所収の真木柱巻の切については、筆者を二条為氏と伝える由なので、この一連の切には、その筆者を巡って、江戸時代の古筆見の間にも、異伝があったとみるべきであろう。要するに、今後の調査においては、為氏筆と称する切にも、十分注意を払ってゆく必要があるといえよう。

五

が、話はこれで終わらない。先に伝為家筆切は、もと超大型の冊子本であったものが、卷子本に改装されていた一

時期があつた旨を述べたが、その伝為家筆切と同様に、もと縦三〇センチを優に越える大型の冊子本ながら、現在では卷子本に改装されて伝存する巻々が、諸家のもとに何点か伝わっているからである。これまた図版で確認できたものに限つて挙げれば、以下のごとし（巻の下の文献名は図版を収めているものを意味する）。

- a 帚木巻 『源氏物語大成』研究編。
- b 花宴巻 『古筆学大成』第二十三卷¹⁶。
- c 蓬生巻 天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集一』（八木書店）。
- d 藤裏葉巻 『日本大学蔵 源氏物語』第十二卷（八木書店）。
- e 柏木巻 『日本大学蔵 源氏物語』第十二卷（同右）。
- f 鈴虫巻 天理図書館善本叢書『源氏物語諸本集二』（八木書店）。
- g 夕霧巻 『日本大学蔵 源氏物語』第十三卷（八木書店）。
- h 幻巻 『思文閣古書資料目録』第百六十八号。

ところが、話がいささかやつかないことに、先に挙げた薄雲巻や若紫・賢木・真木柱の巻々の切と、ここに指摘した巻々とは、明らかに筆跡が違うことである。前者は全体にやわらかく細い線が目立つ筆跡であるのに対して、後者は力強さを押し出した、縦長の文字が目立つ、いわゆる後京極様のそれである。

筆跡を除いた、もと縦が三〇センチを優に越える大型冊子本であることや、至る所に朱の句点が施されている点、さらに一面の行数が十一行である点など、書誌的な面では両者一致するものの、肝心の筆跡が異なるのでは、これらをもと一具のものであつたと、そう簡単には認めるわけはゆくまい。

だが、すでに高田信敬・小林強氏も指摘することく、天理図書館の蓬生巻のそれは、冒頭の十行すなわち、もとの

冊子本でいえば、第一丁の表のみ薄雲を始めとする巻々と同筆で、以後は別人の手となっているのに注意をすれば、こうした現象は、近年、冷泉家の古典籍の調査が進んだ結果明らかになった、俊成や定家のいわゆる監督書写本に比して考えてみることもあるいは可能かもしれない。すなわち、薄雲そのほかの巻の筆者を、今仮にAとすれば、このAなる人物が自らいくつかの巻々に筆を染めたばかりではなく、さらに身边的人々を駆って、他の巻々を書写せしめたが、その際、巻によっては、冒頭のみ自らが写して範を示し、以下を側近に書写させた、とそう考えることができるだろうか。

以上の仮説が認められるとしたら、本稿で紹介してきた伝為家筆切は、薄雲巻の十二葉どころか、全体で十数巻にわたって、大量の本文を今日にまで残していることになろう。だが、筆跡の違う切をツレと認定するには、よほどはつきりとした証拠がなければなるまい。これには、おそらく筆跡の異なる実物同士を目の前で比較してみる、といったきわめて困難な作業を必要とするかと思われるが、果たしてそのようなことが実現するかどうか、まことにこのころもとないかぎりではある。

おわりに

当研究所所蔵の為家筆と称する、源氏物語薄雲巻の断簡一葉を紹介することを目的として筆を執りながら、思わず問題が広がってしまったが、現実には鎌倉中期まで遡ることができる源氏の本文資料は、そうどこにでもあるものではなく、まして、本稿で述べてきたごとく、それがひとり薄雲巻に留まらず、全体で十数巻にも及ぶものであるとしたら、なおさら本文研究の上で簡単に見過ごしたりするわけにはゆかないものといえよう。

将来、この切の問題が大きな広がりを見せるか否かは、今後の検討にもよるが、いずれにしても、注目すべき資料といえよう。

注

- (1) 藤井隆・田中登『国文学古筆切入門』（和泉書院、昭和六十年）一七八頁。
- (2) 小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（『本文研究』第六集、平成十六年）。
- (3) 新見哲彦「源氏物語の受容と生成」（武蔵野書院、平成二十年）。
- (4) 田中登『平成新修古筆資料集』第四集（思文閣出版、平成二十年）。
- (5) 断簡の大きさから、一見したところ、もとは卷子本のように思われるが、冊子本時代の綴穴の跡も、切によつては残っており、もとは超大型の冊子本であったと知られる。
- (6) 池田亀鑑『源氏物語大成』（中央公論社、昭和二十八〜三十一年）に拠る。
- (7) 秋山慶・池田利夫『尾州家河内本源氏物語』（武蔵野書院、昭和五十二〜五十三年）に拠る。
- (8) 高田信敬「源氏物語古筆切二題」（『源氏物語と源氏以前』武蔵野書院、平成六年）。
池田和臣「源氏物語の古筆切」（『中央大学文学部紀要』第九十一号、平成十五年）。
小林強 注（2）に同じ。
- (9) 大内英範「河内本の本文について」（講座源氏物語研究第七卷『源氏物語の本文』おうふう、平成二十年）。
注（7）に同じ。

- (10) 『人物で読む源氏物語 紫の上』（勉誠出版、平成十七年）。
- (11) 『源氏物語千年のかがやき』の解説で、国文学研究資料館の切の大きさを、縦三七・七センチとするが、はたしていかがか。同書の図版の縦・横の比率から、縦は三二センチ前後かと推測される。
- (12) 断間によつては、いわゆる卷子皺が見られるものもある。
- (13) 以下の古筆切については、『古筆学大成』第二十三巻を参照。
- (14) 最近の研究では、岡嶋偉久子「尾州家河内本源氏物語の書誌学的考察」（『源氏物語の新研究』新典社、平成二十年）参照のこと。
- (15) これまた最近の研究を挙げれば、大内英範「尾州家河内本箒木の書写様態をめぐって」（『源氏物語の新研究』新典社、平成二十年）参照のこと。
- (16) この花宴巻については、渋谷栄一「国学院大学図書館蔵伝藤原為家卿筆「源氏物語花宴巻」（一軸）について」（国学院大学図書館紀要第七号、平成七年）に全文翻刻がある。
- (17) 後に述べる天理図書館の蓬生巻のみは一面十行書。